

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25420659

研究課題名(和文)地域の文化遺産が被災後の復興に果たす役割に関する研究

研究課題名(英文)The Role of Local Cultural Heritage during the Post-disaster Reconstruction Process

研究代表者

板谷 直子(牛谷直子)(ITAYA, Naoko)

立命館大学・衣笠総合研究機構・准教授

研究者番号：90399064

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、宮城県南三陸町を対象に、社寺など被災した有形の文化遺産に関する現地調査、祭礼など無形の文化遺産に関するヒヤリング調査を通して、地域に密着した文化遺産と人々のつながりを抽出し、復興を支える基盤となるコミュニティ存続の知見を得た。またこれを、地域の人々が共有し、復興まちづくりの基礎資料とするべくGIS(地理情報システム)を利用し「記憶地図」を提示した。そして、高台移転などで生活圏が移動しても、地域の歴史的環境を存続させるための場所を提案した。

研究成果の概要(英文)：The region hit by the Great East Japan Earthquake is desperately struggling to make progress in the reconstruction process. This study, based on the relationship between a tangible cultural heritage site and intangible cultural heritage like festival that is closely tied with a local community and community members, is aimed to explore a number of measures for maintaining local historic environment and providing local cultural heritage with a modern role, for instance as a disaster mitigation base, and to gain knowledge about the survival of community, which is a foundation for the reconstruction process. From this study, we found the roles that local cultural heritage played when the disaster hit the community, and explore measures for the survival of historic environment after the living space is transferred by 'Memory Mapping'.

研究分野：文化遺産防災学

キーワード：地域文化遺産 歴史的環境 東日本大震災 復興 コミュニティ 記憶地図

1. 研究開始当初の背景

激甚な被害をもたらした東日本大震災後、諸学会や行政等が被災状況の把握、震災復興に向けて、様々な取り組みを進めている。立命館大学歴史都市防災研究所では、被災文化財の地理的分布に着目し、これを把握する基盤的な地理情報の整備、ならびにGIS(地理情報システム)環境を利用した被災文化財の地理的特徴の把握に、文化庁の協力を得ながらいち早く取り組んだ。この過程で、国指定文化財等の被災だけでなく、地域とともにある登録文化財等に多くの被害報告があがっていることが明らかになった。世界に目を向けると、地域がはぐくみ継承してきた有形の文化遺産、また、日常の宗教行為や葬送儀礼等、無形の文化的行為が、社会の基盤を支え、歴史的環境の崩壊をとどめる一助となっている例を見ることができ²⁾。被災地の復興が本格化する時期を目前にして、地域を地域たらしめる地域の文化遺産の存続、また、これに新たな役割を見出し積極的に保全する取り組みは、世界が共有する喫緊の課題となっている。

2. 研究の目的

現在、東日本大震災の被災地では遅々として進まない復興の過程にあえいでいる。被災地では、時として崩れそうになるコミュニティを、社寺や祭礼など地域の生活と密着した文化遺産が媒介となって支えている事例を見ることができる。本研究は、地域に密着した文化遺産と地域の人々のつながりの事例から、復興を支える基盤となるコミュニティ存続の知見を得るとともに、高台移転などで生活圏が移動しても、地域の文化遺産に防災拠点等現代的な役割を持たせつつ、地域の歴史的環境を存続させる方策を検討することが目的である。

3. 研究の方法

本研究は、東日本大震災の被災地のひとつである宮城県本吉郡南三陸町を対象とする。研究の方法は、有形の文化遺産に関する現地調査(ハード)、無形の文化遺産に関するヒヤリング調査(ソフト)、これらをもとにしたツール開発を行い、地域の歴史的環境を存続させる方策を提案しようとするものである。

4. 研究成果

(1) 社寺など有形の文化遺産の被災と課題

① 文化遺産被災予測マップの作成

まず、GIS(地理情報システム)を利用して、東日本大震災の津波による浸水域と社寺等の位置情報を重ね合わせ、文化遺産被災予測マップを作成し、被災が予測される社寺等を抽出した。

津波浸水域の地理情報については、国土交通省都市局の「東日本大震災津波被災市街地復興支援調査」の成果をアーカイブ化した復

興支援調査アーカイブ」(東京大学空間情報科学研究センター)のデータを利用した。社寺については、「Zmap TOWN II 宮城県南三陸町2010(2011年3月発行)」、宮城県神社庁の神社一覧、「南三陸町 VIRTUAL MUSEUM」により、南三陸町に存する55件の社寺を特定した。南三陸町の津波被害は甚大で、沿岸部の低地の大部分を含んでいる。津波は河川沿いの谷地形に沿って内陸部へ遡上し、南三陸町の中心市街地である志津川地区では、最大で海岸からおよそ3km内陸の地点にまで到達している。本研究では、文化遺産被災予測マップにより、被災が予測される社寺22件(被災率:40%)を抽出した。

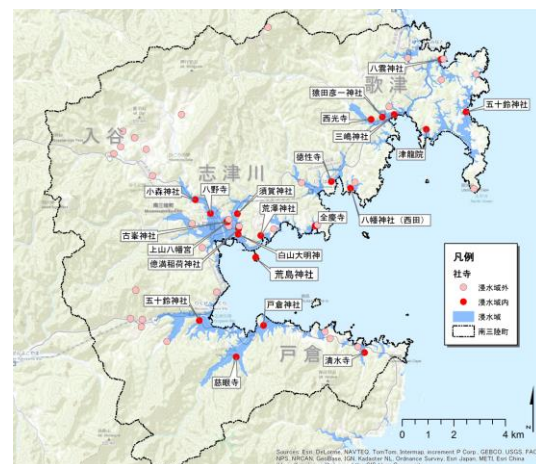


図1. 文化遺産被災予測マップ

② 文化遺産被災予測マップで抽出した被災が予測される社寺等文化遺産の現地調査

文化遺産被災予測マップにより抽出した社寺等文化遺産22件を対象に、2013年8月、および、2014年4月、現地調査を実施した。津波浸水域では、社寺の境内等に激甚な被害がみられた。しかし、被災した神社の約6割の本殿に顕著な被害が見られなかった。また、寺院では境内墓地が高台にあり大きな被害が見られなかった。これは、本堂が流失しプレハブの仮本堂としている寺院においても、境内墓地は被害を免れている。南三陸町の津波浸水域では、神社の本殿(神さま)、寺院の境内墓地(ご先祖さま)は、安全な高台に立地していることを確認した。

一方、震災から約3年が経過した時点で、沈下した地盤ではすでに土盛りが進められていた。それらの区域では、社寺があったはずの場所が整地され失われているものがある。山裾では塩枯れした樹林が撤去されており、境内樹林も同様である。周辺の整備とともに剥き出しになった神社がある。これらでは、神社が持っていた地域の歴史文化を象徴する聖なる雰囲気損なわれている。

(2) 祭礼など無形の文化遺産の現状と課題

① 祭礼に関するヒヤリング調査

宮城県南三陸町志津川地区において、東日本大震災の前後における、有形無形の文化遺産と地域とのつながりを把握することを目的に、祭礼に関するヒヤリング調査を実施した。調査対象は、志津川地区の祭礼や地域信仰の中心的な役割を担ってきた五つの神社（上山八幡宮、保呂羽神社、荒島神社、西宮神社、古峯神社）である。ヒヤリングは、それぞれの神社の祭礼をつかさどる宮司、神職、別当、世話人、氏子総代、計7名に実施した。調査期間は、2014年8月26日～28日である。これに加えて、2015年2月18日に、補足調査を行った。主な質問項目は、神社の主祭神と由緒、震災前の祭礼の状況、渡御のルートと祭礼遂行上重要な地点およびそれぞれにかかわる記憶など、祭礼を支える人や組織、東日本大震災後の祭礼の状況、震災後の神社と人々の関わりなどである。

② 上山八幡宮の祭礼

ヒヤリング調査を実施した5社のうち、上山八幡宮の事例について詳報する。

・ 慶長三陸津波（1611）後の江戸期の復興まちづくり（南三陸町志津川地区）

三陸沿岸は、津波の被害を繰り返し受けている。約50年に一回多数の死者を出す津波を経験してきた。寛文8年（1668）の碑には「高橋仁左衛門が五日町から十日町の町割りをした」ことが記され、気仙道本吉宿が整備されたことが伝えている。五日町大契約講の由来には「八幡川周辺は津波被害が多く、川に囲まれ避難が難しいことから、八幡川の河床を変更し、海円寺山（上山）周辺を埋め立て、移転するために元禄4年（1691）に契約講を組織した」とある。気仙道は上山の高台を囲むように屈曲している（図2）。江戸時代の復興まちづくりによる町割りは、津波の際、高台に避難しやすいよう整備されたものであると言われている。



図2. 気仙道（本吉宿）位置図³⁾

・ チリ地震津波後に次なる災害に備え高台に移転し、東日本大震災の津波被害を免れた神社の本殿

上山八幡宮の創祀は戦国期に戦略拠点のひとつであったとされる朝日館跡の「南向い惣葉沢に勧請せられた」とある。その後、慶長三陸津波（1611）から約200年を経、大津波の記憶が薄れてしまった「寛政5年（1793）

に至入塩入に御遷座され」た。しかし八幡川右岸の塩入付近は津波被害を多く受けたところであり「昭和35年（1960）5月24日チリ地震津波のため、拝殿並びに社務所に浸水し、境内の樹木は悉く枯死する被害を受けた。加うるに同41年（1966）9月の26号台風により再度の災害を被ったので、同44年（1969）6月復興委員会を設立して、御復興にあたり、高台の上山に曳家し「同46（1971）年3月遂に工事を竣え鎮座の儀を行った」とされている³⁾。チリ地震津波後の復興において、次なる津波に備えるため高台に移転したことが奏功し（図2黄色矢印）、上山八幡宮の本殿は東日本大震災の津波被害を免れた。

・ 祭礼を支える人や組織

上山八幡宮は、責任役員と、総代・世話人・氏子からなる地縁に基づく氏子会に支えられている。氏子は、震災前には約1200軒あった。各戸から供進金を集め、上山八幡宮と祭礼を支えていた。幹部は総代と世話人で、震災前は総代が約20人、世話人が約30人であった。祭礼の際には、世話人が、境内の掃除、注連縄のお飾り、神楽台を組み立てなど祭礼の準備をした。氏子の居住域は、志津川の中心部が主な範囲である。その大部分は東日本大震災の津波で流失した。

・ 東日本大震災前の祭礼

上山八幡宮の例祭日は、9月15日である。宵宮には、上山八幡宮の神楽殿で、夜神楽を奉納する。例祭日には稚児行列を行った。稚児行列は、上山八幡宮での祈祷ののち、装束をつけた就学前6歳の子供たちと母親が、午前10時から2時間程度かけて、天狗や神輿とともに志津川町の中心部をゆっくりと歩いた（図3緑線）。ルートにある3か所の空地では、稚児行列が休憩し、お札が配られた（図3星印）

1975年に公立志津川病院ができたのちはルートを変更し、入院患者の要望に応えた（図3黄緑線）。6歳の子供にとって、衣装をまとい2時間の距離を歩くのは容易ではない。稚児行列は一種の通過儀礼であり、それを地域の人々が祝福する地域行事の側面も持っていた。

・ 東日本大震災後の祭礼

志津川は町のほとんどを津波で失った。そのため、震災後は稚児行列を行うことができない。幸いにも稚児衣装が65着残ったので、上山八幡宮の本殿で稚児祈祷のみ行っている。例祭日、今年就学する6歳の子供たちの稚児祈祷のために、氏子が遠方の仮設住宅などから集まってくる。上山八幡宮の氏子は、震災後、登米市の仮設住宅や、町外、県外各地に分かれて暮らすこととなった。宮司が所在を確認しようとしたが、個人情報保護の壁があり、避難所等で情報を得ることさえできなかったとのことである。震災から4年が経

過した 2014 年の例大祭では、お参りに来る氏子さんに記帳をしてもらい、氏子会名簿に準ずるものの作成を試みた。祭礼を媒介として、各地に切り離された氏子会を再構築する試みである。

③ 南三陸町志津川地区五社における東日本大震災後の祭礼の状況

南三陸町志津川地区で実施したヒヤリング調査をもとに把握した東日本大震災後の祭礼の状況をいかにまとめる。

- ✓ 地域にとっての普遍的な価値の記憶を継承できている

上山八幡宮の稚児行列は、子供の成長を地域で祝福する祭礼であった。震災後は、地域の人々が 6 歳の頃にまとったのと同じ稚児衣装を着て祈禱を受ける稚児祈禱へと姿を変え続けている。祭礼は、地域にとって普遍的な価値（地域の子供の成長を喜ぶ）を、世代を超えて共有の記憶とすることを可能にしている。

- ✓ 地域社会の変化とともに変容する柔軟性が祭礼を継承させている

保呂羽神社は山の神様が里を予祝する渡御を含んでいる。祭礼は、里は津波でほとんど失われたが、予祝を受けていた氏子や崇敬者の住む仮設住宅や仮設商店街ヘルートを変更するなど、柔軟性を持っている。

- ✓ 震災前からの課題が顕在化し祭礼が休止している

荒嶋神社の旧契約講、古峯神社の古峯講など、講が支える祭礼は休止している。震災前からの課題であった高齢化や講員の減少が顕在化し、祭礼は休止している。

- ✓ 震災を経て新たな関係が育まれている

西宮神社では恵比須講で御神体などを守っていた。震災後、志津川の西宮神社の正当性を示す書の復元などを通して兵庫県の本社である西宮神社と近くなり交流している。また、上山八幡宮における大祓いおよび正月行事の手伝いを遠方のボランティアが務めるなど、震災を経て、地縁を超えた関係が育まれている。

(3) 記憶地図の開発

① 記憶の記録手法としての記憶地図

記憶地図とは、個人の記憶を共有する試みである。本研究では、祭礼と関連した記憶の語りを調査対象者に求めるに際して、震災前（2010 年時点）および震災後（2013 年時点）の志津川地区周辺の地図を示し、可能な限り地図中の位置と発話を関連づけられるように記録した。とりわけ、祭礼のルートや関連する場所が話題になった際には、意図的にそれが地図上のどの場所かを指示してもらい、カラーペンやシールなどを利用して地図上に位置の記録を残した。また、それぞれの場所に関する記憶の内容を付箋に記入して地図上に貼り付けた。なお、調査に利用した地図は、ゼンリン株式会社の住宅地図データベ

ースである Zmap Town II を、GIS ソフトウェア（ArcGIS10.2, ESRI Inc.）を利用して加工し、A0 版のサイズで印刷したものである。これら地図上に記録された情報は、ArcGIS10.2 を用いて GIS データの形式に変換した。地点に関する情報はポイント、祭礼ルートや、関連する地点を結ぶ概念上の線などはラインのレイヤーとし、これら地理的事物に対応する属性情報として発話の内容を文字列のフィールドとして記録した。本研究での記憶地図は、これら GIS データとして記録された記憶を、対象地域で執り行われている祭礼別にまとめなおし、主題図として視覚化したものである（図 3）。



図 3. 上山八幡宮例大祭記憶地図

② 記憶地図の可能性

本研究では、地域で営まれてきた祭礼の実態やその変遷、祭礼の中で意味づけされた場所といった、これまであまり可視化されることのなかった知識の理解を助けるために、記憶地図という手法を開発した。東日本大震災の被災地においても、現代の都市計画によって復興が進みつつあるが、被災者はこれまでの住み慣れた故郷とは異なる環境になっていくことに違和感を示している。記憶は個人が個別に持つものであるが、地図を介して共有することで地域の共有の記憶になることを今回の調査で確認することができた。この記憶の共有を通して、懐かしい未来に会える復興の一助となることを祈念している。

(4) 地域が育んだ歴史的環境を継承する

① 有形無形の文化遺産継承の課題

本研究を通して抽出した課題をいかに記す。

- ✓ 祭礼の催行に必要な場所を復興整備計画に盛り込む

渡御などの催行にあたっては、神社と氏子の居住地や生業を営む場所を結ぶ道、神輿が休憩しお札を配るオープンスペース、地域の人々が集まり祭礼の準備ができる集会所、そして、祭礼にふさわしい雰囲気が必要である。復興整備計画の中に、祭礼の催行を前提とした場所を盛り込むことが望まれる。

- ✓ 祭礼で防災の知恵を後世に伝える
- 稚児行列のルートは江戸時代に整備された、

災害に強い町割りを辿っていた。祭礼には地域の復興の記憶が刷り込まれている。今後復興される祭礼には、防災の知恵を後世に伝えるものであることが望まれる。

✓ 祭礼を支える組織の連携

荒嶋神社では、歴史的に祭礼を支えてきた旧契約講と新契約講との連携は難しかった。今後、祭礼を支えたいけれども旧来のようには支えられない若い世代と、どのように連携を図っていくかが課題となろう。

② 地域の文化遺産が被災後の復興に役割を果たす場所の提案

被災地では、我々が作成した「記憶地図」を媒介として、従来、意欲はあっても祭礼の担い手となるのが難しかった若年層が、祭礼の再興に向けて活動を始めている。本研究を通して、祭礼の詳細やかつての実施状況の記憶を記録することが、地域の記憶の共有、地域が守り育てた有形無形の歴史的環境を継承し、ひいてはそこにしかないコミュニティを回復する一助となることが確認できた。ヒヤリングにおいて、将来の安全性を目的に、防潮堤の建設、地盤の嵩上げが進み、自分がどこにいるかわからないと不安そうに語る声を聞いた。土地形質は変容しても、過去から継承してきた祭礼の継承は、人々のアイデンティティ回復のためにも急務である。祭礼の継続には、コミュニティの再興とともに、それを可能とする場の回復が重要である。今回の研究では、これについて計画案を作成した。今後は、これをいかに実現していくかが、課題である。

<引用文献>

- 1) 中谷友樹、瀬戸寿一、長尾論、矢野桂司、板谷(牛谷)直子、「東日本大震災による文化遺産の被災状況について 文化財被災地理情報データベースの利用」、歴史都市防災論文集、5巻、2011、201-208
- 2) Rohit JIGYASU、板谷(牛谷)直子、「カトマンズ溪谷の伝統的集落ブンガマティの変容と脆弱性の増大に関する研究」歴史都市防災論文集、3巻、2009、195-202
- 3) 南三陸町第2回災害復興会議追加資料
- 4) 宮城県神社庁、南三陸町の神社

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 板谷(牛谷)直子、中谷友樹、前田一馬、谷端郷、平岡善浩、「[「記憶地図」による無形の文化遺産の現状と継承の課題—宮城県南三陸町志津川地区における地域の祭礼を事例として—」、歴史都市防災論文集、査読有、9巻、2015、73-80
- ② 金度源、石田優子、崔明姫、米島万由子、板谷(牛谷)直子、大窪健之、「東日本大震災に学ぶ歴史都市防災まちづくりに向けて」、歴史都市防災論文集、9巻、

2015、279-286

- ③ 板谷(牛谷)直子、Rohit JIGYASU、中谷友樹、「宮城県南三陸町の被災した文化遺産の現状と復興の課題」、歴史都市防災論文集、査読有、8巻、2014、55-62

[学会発表] (計 3 件)

- ① Naoko ITAYA, Lessons learnt from post disaster reconstruction of Minami-Sanriku-Cho damaged by 2011 East Japan Earthquake and Tsunami, Workshops on Post Earthquake Recovery of Cultural Heritage, February, 22~26, 2016, Kathmandu, Nepal
- ② 板谷(牛谷)直子、「[「記憶地図」による無形の文化遺産の現状と継承の課題」、歴史都市防災シンポジウム、2015年7月4日、京都府京都市、立命館大学
- ③ 前田一馬、谷端郷、中谷友樹、板谷(牛谷)直子、平岡善浩、「[「記憶地図」を活用した被災地における地域文化の継承に向けて]」、2015年3月28~29日、日本地理学会春季学術大会、東京都、日本大学

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

板谷(牛谷)直子 (ITAYA, Naoko)
立命館大学・衣笠総合研究機構・准教授
研究者番号：90399064

(2) 研究分担者

ロヒト・ジグヤス (JIGYASU, Rohit)
立命館大学・衣笠総合研究機構・教授

研究者番号： 70573781

(3) 研究協力者

中谷 友樹 (NAKAYA, Tomoki)
立命館大学・文学研究科・教授

平岡 善浩 (HIRAOKA, Yoshihiro)
宮城大学・事業構想学部・教授

佐々木 葉二 (SASAKI, Yoji)
ランドスケープアーキテクト

谷端 郷 (TANIBATA, Go)
立命館大学・文学研究科・博士後期課程

佐藤 弘隆 (SATO, Hirotaka)
立命館大学・文学研究科・博士後期課程

前田 一馬 (MAEDA, Kazuma)
立命館大学・文学研究科・博士前期課程